



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4414 号 2018.6.1 発行

介護現場にアダルトグッズ？



NHK ニュース 2018年5月30日

「アダルトグッズメーカーが介護の分野に進出」と聞いて、あなたは何を思うだろうか。いったい誰がアダルトグッズを使うのか。単なる話題づくりではないか。さまざまな疑問や違和感を覚える人も多いのではないだろうか。しかし現場取材してみると、そこに横たわっていたのは、高齢化が進む一方でなかなか正面から話す機会がない「高齢者の性」の重い現実だった。(科学文化

部記者 国枝拓)

“アダルトグッズと介護” 異例のコラボ

「アダルトグッズメーカーが介護事業者と提携することになった」

取材先から知らせを受けた私は、正直、驚きと戸惑いを隠すことができなかった。

介護を受ける高齢者にとってアダルトグッズは縁遠いものと感じたからだ。

しかし、話を聞いてみるとメーカー側も介護事業者側も大まじめなのだという。なぜそのようなことになったのか、話を聞かせてもらうことにした。

訪れたのは、全国で入浴に特化したデイサービスを展開する介護事業者「いきいきらいふ」。

その日は「高齢者の性欲とどう向き合うか」をテーマに、全国の店長クラスを集めた研修会が開かれていた。

参加者は男女およそ30人。

それぞれ、自慰行為に使うアダルトグッズを手にしていった。

筒状のものや卵形のものなど、用途や男女の別に応じて種類もさまざまだ。

「中にはローションが入ってます」

「これは勃起しなくても快楽が得られるように開発されました」

「握力が弱くても使えるよう工夫しています」

メーカーの担当者から使い方の説明を受ける表情は真剣そのもの。



近くこれらのグッズを希望する施設利用者に販売し、自分で性欲を処理してもらう計画だ。高齢者介護の業界では初めての試みだという。

彼らがここまでの取り組みに踏み切った背景には、現場が直面しているのっぴきならない事情があった。

深刻な性的トラブルの現状

「いきいきらいふ」が社員に行ったアンケート結果が



ある。

施設を利用する高齢者から受けたセクハラを含む性的トラブルの実態調査だ。

「チューしちゃおうかな、おしりタッチしようかなと言われる」

「ホテルに行こうと言われた」

「胸を触られた」

「体を洗っていたら『元気になっちゃうな』と勃起した陰部を見せられた」

回答した人のおよそ4割が性的トラブルを経験していたほか、トラブルに当たるかどうか判断できないとして「わからない」と答えた人も含めると、その割合は半数に達していた。

こうした行為に及ぶ高齢者は、認知症など判断力の衰えた人たちばかりではない。経営陣が「ショックでした」とうなだれるほどの衝撃的な内容だった。

高齢者の性、苦悩する現場

「高齢になると、性欲や性的な気持ちはなくなっていくものなんだというイメージでした。でも働き始めてからイメージが大きく変わりました」

江東区の店舗で入浴介助を担当する山内粧也香さん（25）も、性的トラブルの経験者だ。

介護現場の性的トラブルは「よく聞くし、よくあること」。最近も、80代後半の高齢者に服を着せるときに体を触られたという。

山内さんは、こうした行為を行う高齢者が自分たちの「客」であることが、問題の表面化を妨げる一因になっていると感じている。

「起きたことを報告して共有できたらいいのですが、言えずにしまい込むとどんどん辛くなる。お年寄りには性欲がないと思っている人も多いので、正しい知識を共有することがまずは大事だと思います」



福住尚将取締役（39）は、セクハラには毅然と対応すべきという立場だが、現場で起きているトラブルは「セクハラ」と簡単に切り捨てられない複雑さをはらんでいると言う。

高齢者の性欲を抑えつけるだけでは根本的な解決にはならない。

しかし、職員が直面するトラブルは減らしたい。

それならば、お年寄りの性欲に向き合い、自分で性欲を満たしてもらえばいい。

逆転の発想で思い至ったのが、アダルトグッズを導入するという試みだ。

「すぐに答えが出る問題ではないと思いますが、これまで業界が意識的に避けてきたことを提起できればと考えています。意識を変えていかないと、これから先、さらに深刻化していきます」

老いらくの恋 その実情は

さまざまな場で「高齢者の性」の問題を話すと、「いい年をして何をしているんだ」といった反応を聞くことが多い。

「高齢者は性欲がない」というイメージが強いからだ。

しかし、興味深いデータがある。

日本性科学会が4年前に発表した「中高年セクシュアリティ調査」だ。

それによると、「この1年間に性交渉をしたと思ったことはどれぐらいあるか」という質問に、

配偶者のいる男性では、▽60代の78%、▽70代の81%が、「よくあった」、または「ときどきあった」、「たまにあった」と答えている。

同じく配偶者のいる女性も、▽60代で42%、▽70代で33%が、「あった」と答えた



という。

さらに60代から70代の単身者でも、▽男性の78%、▽女性の32%が、「あった」と答えている。

たとえ高齢になっても、性欲は健在なのだ。

施設内恋愛をする高齢者

「最近は気持ち若いお年寄りが増えていて、施設の中でも高齢者男女の恋愛沙汰が増えています」

島根県内の特別養護老人ホームで介護分野の責任者を務めている長峯妙子さん(52)は、このように証言する。

長峯さんのいる施設では、去年、深夜に介護スタッフが思いがけない場面に遭遇した。

入居する90代の男性と80代の女性が女性の部屋で性行為に及んでいたのだ。

2人に認知症はなく、相思相愛の関係が深まった結果だと見られている。

2人の行為をとがめて引き離すのか、恋愛の形として認めるのか。

家族への配慮などもあり答が出せないでいるうちに、男性は他界してしまった。

しかし、男性は亡くなる直前まで相手の女性への恋愛感情を抱き続け、それが生きる支えになっていたという。

長峯さんは、「お年寄りにも性欲があることを認めて受け止めることが、彼らの生きがいにつながる。そこに目をつぶっては本当の意味での介護にはならない」と話す。



“高齢者の性をタブーにするな”

「セックスと超高齢社会」などの著書で知られる一般社団法人「ホワイトハンズ」の坂爪真吾代表理事(36)は、高齢者に性欲はないとする考えが社会にまん延してきたことが、介護現場のトラブルにつながっていると指摘する。

摘する。

「相手が性欲のない存在としたほうが支援や関わりを持ちやすい。基本的に介護のサービスはそうした前提でうまく回ってきた側面はある。介護する側とされる側の当事者どうしの認識のズレがあり、それが根本的な問題につながっています」

そのうえで坂爪さんは、高齢者の性は決して施設内だけの問題ではないと指摘する。

法務省の「犯罪白書」によると、高齢者の性犯罪は増え続けている。

おとし(平成28)検挙された高齢者は、統計をとり始めた昭和61年と比べて、強姦は8.6倍に、強制わいせつは2.1倍に増加。窃盗や詐欺などと比べて大幅な増加率となっている。

坂爪さんは、高齢化などに加えて、高齢者が性欲を隠すことを余儀なくされ抑圧されている状況が、背景の一つとなっている可能性があると考えている。

では、どうすればいいのか。

坂爪さんは、高齢者の性の問題をオープンに語れる環境作りの大切さを訴えている。

「性は、人間らしく生きていくための最低限必要な部分です。高齢者の性は遠い世界の他人事ではなく、自分自身や自分の周り、自分たちの問題として見方を改め、公の場で議論したりケアしたりする仕組みができればいいと思います」

タブーを破るために

アダルトグッズの導入を決めた介護事業者「いきいきらいふ」では、今も議論が続いている。

「自身で性処理を行うことでお年寄りの自信につながる」、「性欲が解消されてトラブルが減るのでは」といった肯定的な意見の一方、

「逆に性的な欲求を高めないか」、「家族にどう説明するのか」といった慎重な意見も出ている。

そのうえで、今後、利用する高齢者とその家族を巻き込んで「性」について自由に語れる

雰囲気作りを進めていくことを確認した。

取り組みが効果を上げるのか、その答えは、まだ出ていない。

自分の性と向き合う

高齢者の性をめぐる今回の取材は、私にとって、まさに自分の性と正面から向き合う機会となった。

性は、どうしても自分の経験なしに語れない。当然、語ることへの恥じらいや抵抗感もある。しかも、高齢者の問題を語れば語るほど、自分の親や将来の自分の姿が脳裏をよぎり、思わず口ごもることもある。

しかし、これこそが、社会が長い間高齢者の性をタブー視してきた背景にあるのではないか。

性は本能に根ざしたものであり、人間らしく生きていくために必要なものでもある。

一方で、日本人の平均寿命は伸び続け、高齢化はますます進んでいる。

高齢者の性に対する先入観を捨て、正面から向き合うべき時が来ている。

「高齢者の性を否定することは、人間性を否定するのと同じ」

取材中に会った高齢者のまなざしは、私にそう訴えかけているようだった。



強迫性障害を描く漫画家



カンテレ 報道ランナー 2018年5月29日

「戸締まりを何度確認しても安心できない」

「手を何時間洗っても綺麗になった気がしない」

これは「強迫性障害」の症状を漫画で表現したものです。

不安が頭から離れず、それを打ち消すための行動を、度を越して繰り返してしまうのが特徴で、あまり知られていませんが心の病です。

この漫画を描いた漫画家も実は「強迫性障害」

に悩む1人。

一体どんなメッセージをこの1冊に込めたのか、取材しました。

漫画家のみやざき明日香さん（31）。

ことし2月、強迫性障害について描いた漫画を出版しました。

漫画のモデルは、みやざきさん自身。

今も続く、強迫性障害との闘いの日々を描きました。



【みやざきさん】「出かける準備...皆さんがいらっしゃるので、割と安心感はあるんですが...。全部のカギを写メで撮らないと怖いんですよ。 consentは撮っておかないと、確認してたらもう時間がかかってしまうから、写メで撮って」

この時のみやざきさんの頭の中は「戸締りをちゃんとしないといけない」という”強迫観念”でいっぱいです。

【みやざきさん】「ヘアアイロンが一番こわいので、consentが近くにない場所において、consentにささってないってことをちゃんと撮ってから・・・(カシャッ) じゃないと家出られない。ヘアアイロン熱くなるから、火事起こしそうで怖いんです」

過度な心配性に見えるかもしれませんが、みやざきさんは、これだけ確認を繰り返しても、安心できません。

（玄関の鍵を確認）「一人のときは10分位やってるときもありますけど。これで大丈夫で

す。はい、大丈夫です。行きましょう。他に確認してくれる人がいるって分かっているけど、やっぱり体が震えるくらい怖い。外に出る時は・・・」

これは、強迫性障害の症状のひとつ「確認強迫」です。



強迫性障害は、別名「とらわれの病」といわれていて、自分の意思に反して不安や恐怖が頭に浮かび、それを振り払い安心感を得るために、様々な行為を繰り返してしまう病気です。

厚生労働省によると、国内には約100万人の患者がいると推定されています。(受診の必要のない軽度も含む)

例えば、

みやざきさんには「落とし物をしていないか」という強迫観念も常にあり、落ちているものが自分のものでないか確認せずにはられません。落とし物をする事で起こり得る、最悪の事態に考えが支配されているのです。

みやざきさんが不安を抱えるきっかけになったのは「父親の死」でした。

中学1年のとき、胃ガンになり長い入院生活を余儀なくされた父。

みやざきさんは病気への嫌悪感から、うまく接することが出来なくなりました。

【みやざきさんの漫画より】「私が中学2年の秋に父は死んだ。もう汚いものを見なくていいんや・・・とホッとしたのだった。あるときふと、父のことを思い出した。父は私をとてても可愛がってくれていたのだ。謝りたかったけど、父はもういなかった。どうして父に優しくできなかったのだろうと、後悔した。手を洗うと不安なが流れ落ちるような気がした・・・」

【みやざきさん】「後悔もですし、思い出す父親の姿が病気ってつらいじゃないですか。ずっと心の中にしまっていたけど、私の中にある恐怖心とか不安っていうのは、中学生のときのあの経験からかなっていうのは思いますね」

常にある不安な気持ちに蓋をして、24歳のとき、夢だった漫画家デビューを果たします。



プロの世界の重圧の中で、いつしか「自分の手が原稿を汚してしまう」「汚れが人にうつってしまう」と思い込むようになり、症状が一気に深刻化。血が滲むまで手を洗うようになりました。風呂に入ったり確認したりすることにも、毎日数時間を費やし、日常生活が強迫観念に支配されていました。

【みやざきさん】「念入りに洗わないと。私の手が汚れていて、商品にその汚れがついて、その商品をさわった人まで汚してしまうっていう強迫観念があるから、それを取り除くために洗わないといけないんですよ。普通の人は何も気にしてないことだから、私も気にしないで生活したいんですけど、でもどうしても恐怖が勝ってしまってやってしまうんですね。何も気にしないようになりたいんですけどなかなか...それが難しくって」

助けが欲しくて、たくさんの本を読み漁りましたが、ほとんどが小難しい医学書ばかり。説明のつかない、自分のおかしな行動に苦しむ誰かの「救い」になればと自分のことを漫画に書くことにしたのです。

ことし2月に漫画が出版されると、みやざきさんの想像以上に反響が寄せられました。

【みやざき】「はじめまして、こんにちは。みやざき明日香です」

感想を直接聞きたいと投げかけると、4人が集まってくれました。全員、同じ病で悩む人



たちです。

【31歳男性】「確認したのに・・・あるでしょ？」

【全員】「うん、あるあるある」

【28歳男性】「ぼくはそれ（病気）がきっかけで仕事辞めたといっても過言ではないんですけど。ぼく、不潔恐怖なんですけど、シャワーが2時間ぐらいかかるときがあって、1ヵ月の光熱費が6～7万円のとときがあって。それが苦しい所ですね・・・。『恐怖が理屈に勝る』っていうセリフが（漫画に）あったんですけど、強迫性障害のことを一番とらえているんじゃないかなと思って」

【33歳女性】「そう、そう、そうなのっていう、その感覚ですみたいな。わかるわかるの共感の連続でした」

みな、強迫性障害と長く向き合ってきましたが、周りの人、ときには家族にさえも理解してもらえず苦しんできました。

【40代男性】「普通の人の理解が及ばん世界ですから」

【みやざきさん】「説明しようにもできませんもんね」

【33歳女性】「だから...なんかこう、（家族と）どんどん険悪になっていく」

【40代男性】「（病気のことを）文字に書くとすごい難しく感じるが多々あるんで、それを漫画で伝えるのは素晴らしいなと思うんで。しかも先生（医師）じゃなくて、体験者が伝えるのは大きいと思う」

【みやざきさん】「24歳の頃から8年くらい苦しんできたんですけど、この8年間を無駄にしなくなかったんですよ。ダイレクトに読者の方から感想いただけるのはすごく嬉しかったですし、批判的な内容があったとしても受け止めて次の反省にいかせると思いました。やって良かったです」

みやざきさんの主治医は、強迫性障害を「決して珍しくない病気」だと強調します。

【神宮前こころのクリニック・岡田光司医師】「心理的なストレス・プレッシャーで起こることもありますし、何の誘因もなく、女性だったら出産を機に起こったりもしますし、原因はまだはっきりとされておりません。どこからが異常でどこからが正常かは言いにくいんですけど、やっぱり日常生活に支障をきたしているということが診断の基準になってきます」

現在、薬の服用や行動療法で症状が改善することがわかっていますが、病気自体の認知度が低く、治療に結び付かないまま重症化してしまうケースが多いのだそうです。

【みやざきさん】「肉と一緒に炒めようかな」

みやざきさんは、最近、料理をする機会が増えました。

【みやざきさん】「前は食器ひとつ洗うのでも大変だったけど、今はそこまで気にならなくなったので。料理も簡単にできるようになった」

【みやざき】「もう一回手を洗うから」

【母】「これが大変です」

【みやざきさん】「よし。これで出来ました！」

【母】「見せなあかんわ」

【みやざき】「あ、めっちゃ触ってしまった。大丈夫ですか？気にしないですか？手洗ったんで。はい、出来ました！」

症状がなくなったわけではありません。

でも、自分の可能性を広げるために、少しずつ前に進みます。



働きたくても働けない「グレー層」を救うかつてない自治体支援

池上正樹：ジャーナリスト

ダイヤモンドオンライン 2018年5月31日

働きたいと思っているのに働けずにいる人をサポートしようと、全国で初めて「支援付就労」の条例を制定した静岡県富士市の取り組みは、どこが斬新なのか（写真はイメージです）



全国初の市条例から1年 「支援付就労」で蘇った人々
年齢などに関係なく、働きたいと思っているのに働けずにいる人をサポートしようと、全国で初めて「支援付就労」の条例を制定した自治体の取り組みが注目されている。

市が呼びかけた支援付就労に60社以上の企業が協力、事業がスタートして1年の間に、長年引きこもってきた人や81歳の高齢者の雇用が実現した。

そんな「ユニバーサル就労推進条例」を2017年4月から施行したのは、静岡県富士市。ユニバーサル就労支援とは、当連載の記事でも取り上げた通り、「働きたいけれど働けずにいる人」を対象に、働けるようにサポートする仕組みのことをいう。

同市では、この意味をさらに幅広い「支援付就労」に置き換え、年齢や障害者手帳の有無などに関係なく、就労ブランクが長い、引きこもり状態にある、コミュニケーションが苦手、といったすべての働きたい人が働くことのできる地域づくりをしようという趣旨で、この事業を始めた。

「若者支援、障害者支援などの従来の法律の枠組みでは当てはまらないグレーゾーンの人たちは、既存の福祉・就労サービスが使えない。そうしたグレー層も含め、本当は働きたいのに困っている人に何かできないだろうかと考えたのです」

そう説明するのは、同市福祉こども部生活支援課の松葉剛哲上席主事。

条例制定のきっかけは、2014年に障害のある子どもを持つ「ユニバーサル就労を拓げる親の会」から約1万9000人の署名を添えた要望を受けて、市議会が党派を超えた議連（発起人・大和田隆市議＝当時）をつくったことにある。

前例が何もない中で市が手始めに取り組んだのは、働きたい人が何でも相談できる“よろづ相談所”のようなものだった。そのためには、従来の縦割りだった役所の庁舎内で部署を超えて、横断的に連携する検討委員会を立ち上げる必要があったという。

この委員会で、生活支援課や商業労政課、障害福祉などの各部署が提案した事業数は、当初の13事業から現在は42事業にまで拡大。市は条例の施行に併せ、ユニバーサル就労支援センターを開設した。

企業に雇用を呼びかけやすい 富士市ならではの法的根拠

こうした制度の谷間を埋める事業を後押しするために、市が条例までつくって実施するのは大きな意味がある。



ユニバーサル就労支援センターのスタッフ

同市の条例には、第6条に「事業者の責務」として、「雇用の創出・拡大」や「1人ひとりの個性に配慮しながら働きやすい職場環境」を整備し、市の施策に協力するよう定められている。実は、この条例があることによって、市が企業に協力を強く呼びかけやすい法的根拠にもなっているというのだ。

「生活弱者の雇用に関するアンケートを取ったときは、及び腰の企業が多かった。でも、『市が条例をつくったので企業さんにもご協力いただきたい』と言うと話を聞いてくれるし、理念に対しても理解を得られるところが大きく違うんです」（同支援センター）

これまでは、引きこもっているようなどこにも属さない人たちの元には、なかなか支援の手が届いていなかった。しかし、同市の「支援付就労」とは、それぞれの働きづらさを1人ずつ聞いて、特性や働きづらさをアセスメントして企業に伝え、段階的に就労してもらおうという、オーダーメイドの支援だ。

対象者は、生活困窮者自立支援法の相談窓口である生活支援課や社協の相談窓口、病院の就労支援窓口などで相談した際に、既存の制度を利用できない場合、同センターに紹介される。

センターではまず、面談などによって、それぞれの人の強みや弱み、特性などをアセスメント。協力企業の職場見学に参加したり、面接したりして、お互いが気に入れば、1~2回就労体験に入る場合もある。



期間と時間を決めて仕事を体験 コミューター制度のユニークさ
ユニークなのが、ボランティアとは区別し、職場で期間と時間を決めて「継続的に通う人」という意味のコミューター制度だ。
全戸に配布されたチラシ

コミューターの期間は、長くても1週間から10日程度で、費用はかからない。ただ、雇用契約が発生しないため、労働基準監督署と相談してコミューター確認書を作成し、“貧困ビジネス”にならないよう配慮されている。

コミューターには、無償と有償がある。有償コミューターは、最低賃金基準には満たないものの、多少の費用が支給される。無償の場合でも、企業によっては交通費が支給されることもあるという。お互いの合意が得られれば、コミューター期間がスタート。

その後、雇用契約書を結んで雇用へとつながる。

企業からは、いきなり採用するのではなく、コミューター期間にお互い知り合うことができるのがありがたいと好評だという。またセンターのスタッフは、コミューター期間中、振り返りを毎週行うほか、雇用後も三者が合意するまでの間、毎月定着支援を行っている。

同市の事業に協力を表明している市内の企業は、18年5月9日現在、62社。紙・パルプ産業の街らしく、紙の関連会社や有名菓子屋、鉄道会社などが名を連ねる。毎月開催している合同説明会に参加した企業は、120社を超えた。

事業開始から1年経って、利用者は4月末現在で60人。まだ就労準備やコミューターなどの途中段階にいる人が多く、雇用につながった事例は20人だった。本人からの意思による「中止」も6人いた。

雇用につながった利用者の中には、10年近く引きこもってきた40代の男性もいる。男性は、社会とのつながりを絶つ生活をしてきたが、「変わりたい」と思っていた。しかし、自分だけではこの状況をどうしたらよいか、何をしたらよいかを考えつかなかった。

そんなとき、センターの「支援付就労」という言葉を目にして、「一緒に寄り添って考えてくれる人がいれば……」と思い、一歩踏み出したという。

自分の存在を認めて もらえることが本当に嬉しい

男性は、同センターに来る前までは、人の笑顔を見るのも嫌で人を避けてきたものの、「自分の存在を人に認めてもらえていることが本当に嬉しい」と話しているという。

「ご自分で就労できる方は、自分ができること、できないことをハローワークで伝えられる。言葉で伝えられない方が困っている。彼らの代弁者になって、企業側にも了解、配慮してもらい、社会から取り残されずに働く場をつくるのが、支援付就労なのかなと思っています」(同支援センター)

同市には現在、そもそも条例が議員の発議で始まったこともあり、全国の議会から視察目的の関係者が数多く訪れているという。市民には、「新しい働き方あります！」などのチラシを全世帯に配布したほか、6月22日には「ユニバーサル就労支援合同企業説明会」が市役所で開催される。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行